



市指定文化財 豊臣秀吉書状

◆秀吉から送られた書状

豊臣秀吉（当時は羽柴秀吉）から安禅寺宮に出された書状で、秀吉が安禅寺宮から帷子（夏に着る着物）と帯を贈られたので、その礼を述べたものです。安禅寺宮は当時の天皇、正親町天皇の子である誠仁親王の第三王女にあたります。

安禅寺宮はこの手紙が出されたころは5歳でした。5歳という年齢や女性であるということから、文章のほとんどが読みやすいように平仮名で書かれています。残念ながらこれは秀吉の自筆ではありませんが、朱印は秀吉自身が押したものと考えられます。

◆この頃の秀吉

この手紙が出された天正12（1584）年7月はちょうど小牧・長久手の戦いの最中であり、その頃徳川家康・織田信雄（織田信長の次男で当時の織田家当主）と対立していました。この手紙を出した時、秀吉は京都におらず、徳川・織田側を攻めるために尾張方面に出陣していました。一般的に小牧・長久手の戦いは、徳川側の勝利というように伝えられていますが、実は徳川・織田側が秀吉方に人質を出すことで戦いが終結しており、これ以後秀吉は天下人への道を歩み始めます。この手紙は、当時の秀吉が天皇家に近い立場であったことがうかがえ、非常に重要な意味を持ちます。

◆刈谷と秀吉の関わり

小牧・長久手の戦いの際、刈谷城主の水野忠重とその子である後の初代刈谷藩主水野勝成は、徳川・織田側で参戦し、本治城（現在の名古屋市中南区）や常滑城を攻め落とすなど活躍しました。秀吉が伊勢国桑名を攻めようとしたところ、忠重は刈谷から出陣し、桑名西方の大福田寺（現在の三重県桑名市）に陣を構え、攻め入る秀吉から守り抜き、秀吉は忠重軍を破ることができませんでした。後に忠重が秀吉に仕えるようになると、秀吉はこの桑名での忠重の働きを褒めたといわれています。



自動地球儀時計

化粧道具・鏡台
（個人蔵・歴史博物館寄託）

祖母懐茶壺
（永源寺蔵・歴史博物館寄託）

受け継がれた刈谷の名品

歴史博物館には数多くの収蔵品があります。土器や人骨などの考古遺物、昔の人の手紙や記録、土地証文などの古文書、絵巻物・屏風・掛軸の書などの美術品、化粧道具や食器類などの工芸品、刀剣や甲冑などの武具といった多種多様なものがあり、それらの中には歴史的に変貴重な収蔵品もあります。

歴史博物館や郷土資料館に展示されている収蔵品はその中でもごく一部で、他の収蔵品はなかなか表舞台に出てくる機会がありません。本特集では、そんな眠ってしまった収蔵品の中から選りすぐりの収蔵品とともに、それらにまつわる逸話やエピソードを紹介します。

問 歴史博物館（☎63・6100）

◆刈谷に訪れた皇族

大正5（1916）年11月10日、刈谷の豪商加藤新右衛門宅に皇族の北白川宮成久王が宿泊しました。北白川宮はもとと聖護院宮といひ、伏見宮家から分かれたものです。伏見宮家は南北朝時代の北朝の崇光天皇の子孫であり、宮家の中でも最も歴史の古い宮家です。

◆北白川宮成久王の生涯

陸軍に入隊し、砲兵大佐まで昇進した成久王は、軍事研究目的でフランスに留学しました。車好きだった成久王は、フランスで車を購入し、自身で車の運転をしていました。しかし、フランスで車を運転中、スピードの出し過ぎで車が横転し、木に激突して成久王は亡くなりました。享年35歳でした。

◆なぜ刈谷に？

その成久王が、なぜ刈谷を訪れたのでしょうか。大正5年10月30日より名古屋にいる第三師団の秋の軍事演習が行われており、11月8日には小牧付近、9日には大高・有松付近と移動を繰り返しながら、一週間以上に渡る戦闘訓練を行っていました。成久王は野砲兵第三連隊第四中隊を率いて参加していたため、10日に刈谷に滞在したと考えられます。

滞在場所選ばれた加藤新右衛門は、家の誉れとして、成久王が使用する膳碗類や座布団などの日用品を新しく用意し、もてなしました。北白川宮が使用した膳碗類は白色を基調としていながらも、特に絵柄などの装飾はありません。白色は空間や料理を際立たせる効果があると考えられます。そして、それらは家宝として代々大切に受け継がれています。



きたしらかわのみやなるひさおう
北白川宮成久王
使用膳碗類など